スコーレ・マスターズ通信

第42号
平成23年1月31日

12月11日『首都圏合同研修』開催　永池会長「父親の役割」を説く

中国の家庭事情

12月2日に羽田を立って、例年開催されている中国人民大学孔子研究院の国際儒学学会に元早稲田大学総長西原春夫先生と一緒に参加しました。私が専門の学者としてではなく、家庭教育の現場からの立場で、論語と聖書に共通するキーワードを通して、人が人として生きるために大切にすべきことは何かを私なりに解釈したものを、「生き方の基本」として一冊にまとめたものを出版したことが国際儒学学会参加のきっかけになっています。

中国では批林批孔の風潮の時代を経て、現在では小学校から論語を教える時代に入っています。今回の訪中で、社会科学研究院を訪問した折、私が家庭教育に携わっていることから中国の家庭の現状を聞くことが出来ました。中国は日本よりひどい状況になっていること、家庭内暴力の対象が母親でなく父親となっていることを知りました。母親が家を離れ出稼ぎに行って、父親が地元に残るケースが多いからとのこと。一人っ子政策の結果が顕在化しつつあるのか、中国でも家庭教育が課題となってきているようです。

イデオロギーから解放された立場

私は小学校1年生で敗戦を迎えています。戦後教育をうけた第一世代でもあります。自由・平等が説かれ、親も子も平等とか、家庭の中でもデモクラシーをとかいわれるような時代になったわけです。最近でも、「母親講座」というだけで難色を示すところもあり、「家庭教育講座」と講座名を変えたこともあります。そんなところから、スコーレではイデオロギー的立場からの批判や、いわれなき難詰から解放された立場で、また、明治以降の国家道徳や国家倫理から解放された立場で家庭教育運動を展開してきたわけです。

そのためには、人が生物、動物としての存在であることから説き、進化、発展の結果、父親が形作られてきたこと。人類のたどりついた英知(進化)として、父親の存在があることを説いています。母親は子供に乳をあたえ、抱きしめて育てていきます。父親は外敵から家族を守り、食糧を調達してきます。自然に役割が分担され、共同生活の中から家族の感情が生まれ、ルールが出来上がってきたのです。これは倫理や道徳以前の、人の生物的発展の結果なのです。これは日本でも中国でもまた西欧でも一緒です。女性は子供を産みますが、男性は子を生めない存在です。しかし、子供を育てていく上で父親の役割は厳然としてあるのです。

父親の役割

スコーレではかつて、エゴグラムを使って約2千人の自己診断をしてもらったことがあります。そこからわかったことは、母親とのコミュニケーションを通じて子供は「生きるという力」を、父親とのコミュニケーションを通じて「社会性」を獲得するということです。父親が子供に与えることを受け持つ「社会性」の本質は「法と正義」の遵守の心を子供に与えていくということです。

先にも述べましたが、日本の道徳は明治期以降国家道徳としての側面が強かったのですが、道徳は本来国家を超えるものです。以前、父親たちは自分の行動は別としても「世のため、人のため」とか「人として恥ずかしいことをしてはいけない」といって子供を育てました。敗戦によってこのような父親の姿がなくなりました。

父親を通じて子供に社会性を付与する、このことが大切なことなのです。そのためには、子供たちにはヒーロー(英雄)が必要であるということを知らなければならないのです。松井でもイチローでもまたノーベル受賞者でもいいのです。ヒーローを通じて子供は希望や努力やモラルの根底にあるものを学び取っていくのです。そのヒーローを与えてやるのが父親の役割といえます。

首都圏地区交流会

首都圏地区交流会が、人生学コース及び心身開発トレーニングコースの合同研修終了後17時から相模原市のせんざん本店で、本部から永池会長および小川本部長のご出席のもと開催されました。恒例となった本交流会は、遠くは長野県から1名、山梨県から2名、また初参加の方が1名(村上敬丈氏)の合計40名が出席し盛大に行われました。

冒頭、小俣代表幹事の開会挨拶、永池会長の来賓挨拶、小川本部長の乾杯と続き懇談の運びとなりました。異種・異文化のメンバーが、交流をさらに深め約2時間の和やかな時間を過ごすとともに、「望年会」の文字のとおり新年のそれぞれの活躍を祈念しながら懇談が行われました。締めとして長久保副代表幹事の閉会の辞によりお開きとなりました。

早朝研修表彰者

昨年1年間の早朝研修への参加で、次の各氏が表彰されました。(敬称略)

【皆勤賞】　2名
(東海・中部)鈴木修三郎、(中央)霜田千代松
【精勤賞=欠席10日まで】　3名
(京浜)長久保定夫、(北陸)笹井喜郎
(東海・中部) 小野五三生
【努力賞=出席300日以上】　10名
(北海道)中澤利治、(栃木)川田昌孝
(京浜)岡本一誠、(八王子)米村　陽、小林　晃
(中央)藤田和弘、小川正夫、指宿盛隆
(近畿)細見周造、小野　功

マスターズ会員の表彰者が年々増加しています。平成22年は、15名で皆勤賞受賞者は2名でした。

ハンドインハンド：募金総額 1,262,312円
全国47箇所に989名参加(大人556人、子供433人)

12月12日、ユニセフ ハンド・イン・ハンドに参加しました。ハンド・イン・ハンドは、ユニセフが全国ボランティアとして街頭などで募金を呼びかける募金活動で、今年で32回目を迎えるとのこと。町田小田急駅前には子ども大人あわせて34名が１時間という短い間、大きな声を張り上げて道行く人に募金をお願いしました。

サンタクロースの帽子をかぶった小さなお子さんたちは、それぞれ募金箱を抱え、一生懸命に声を出していました。その様子はけなげでほんとにいじらしい。

私も、パディントンベアのワッペンを胸に貼り付け、微力ながら立たせていただいた。当日は、比較的暖かく、大声張り上げていると汗ばむほどのいいお天気でした。1時間という短い間でしたが、さまざまな人間模様を垣間見ることができました。

募金していただける方は、比較的、年配の方が多かった印象でしたが、2,3人連れの学生さんも結構募金箱に近づいて募金していただきました。わざわざ後戻りして、中には、友達同士で”協議”しながら、募金額を決めている。その様子はなんとも微笑ましい。家族連れでしょうか、小さなお子さんに託し、駆け寄り小さな手を募金箱に伸ばしてくれる。遠くから見守っているお父さんの微笑み混じりの会釈が、私たちの心をあったためてくれる。ほんとにありがたい。今年も、こうして街頭に立たせていただけたことに大変感謝いたします。ほんとに貴重な時間でした。　(藤田　和弘)

編　集：社団法人 スコーレ家庭教育振興協会
スコーレ・マスターズ　広報委員会
発行人：小俣富雄
〒252-0206 相模原市中央区淵野辺4-37-17
TEL ： 042-707-4500
http://www.schole-masters.org

青	朱	白	玄
春	夏	秋	冬

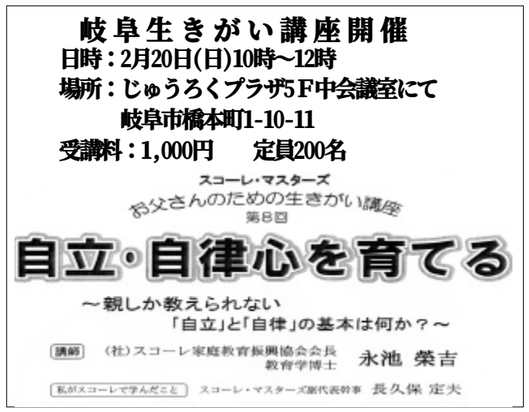
退社時、エレベーターホールでエレベーターを待っていました。やって来るエレベーターが満員状態で、何台かをやり過ごしていました。やがて、順番に人がいなくなり、二人だけがエレベーターを待っていたのですが、まったく空のエレベーターが到着したのです。二人は喜んでそのエレベーターに乗ったのです。しかも一階までノンストップでエレベーターは降りたのです。エレベーターの中で私は乗り合わせた相棒に「○○さんは、今日、きっといい事をしたんだ。このエレベーターはそのご褒美だ」。一階に降りて二人は別れました。

翌日、その○○さんから意外なことを聞きました。「きのう、岡本さんに『○○さんは、今日、きっといい事をしたんだ』といわれたので、帰り道に献血募集で声を掛ける人がいたので献血をしてきちゃいました。いいことをしました」と。

言霊(コトダマ)という言葉があります。永池会長も講話や著書でよく触れておられます。「言葉には力がある」・「よい言葉を投げかけると、よい結果が訪れる」・「子供の長所をさりげなく言ってやる」等々。確かに私も子供の頃、先生に絵をほめられて絵が得意になったことがありますし、大人になっても、会社で、「君は営業の第六感がすぐれている」と上司に言われて、その気になったこともあります。大人でも、また子供でも人と人との関係においては「よき言葉はよき事をもたらす」力があるのです。忘れがちなこのことを暫くぶりに思い出させてもらった出来事でした。　(岡本　一誠)

岐阜生きがい講座開催

日時：2月20日(日)10時～12時
場所：じゅうろくプラザ5F中会議室にて
岐阜市橋本町1-10-11
受講料：1,000円　　定員200名



＊編集後記＊　寒い寒いと思っていましたが、ふと気付くと、年末よりも日が暮れる時間が遅くなり、ピンク色のボケの花が咲いていたり、そして最近では、梅の白い花が咲き始めました。季節は知らないうちに進んでいます。自然の力は、何と偉大なものなのでしょう。今年も、1ヶ月が過ぎますが、自分のペースは掴めたでしょうか。今年も、よろしくお願いいたします。　(菊地　啓)

♪♪♪ 投稿コーナー ♪♪♪
（早朝研修皆勤者の声）

一本の見えない糸

東海中部地区　　鈴木修三郎

一年を通して早朝実践にチャレンジしようと決意するとき、何ともいえない緊張感とともに一本の見えない糸が心の中に張られるのがわかります。一日休むとその糸は切れすべては水の泡というむなしさを味わうことになります。同じハードルを越えようと進んでいる人の胸中がよくわかります。

例えば、その糸が切れたのが8月であった場合、次回の皆勤を目指すには1年と4ヶ月の歳月を必要とします。「皆勤」は1月1日から12月31日まででカウントされているからです。ともすれば、「今年は適当にして来年がんばろう」となりやすいのですが、糸の切れた後の心の持ちかた次第でその後の再挑戦に大きな違いが生まれます。私はその違いを、「メジャーとマイナーの違い」と表現しています。

ある程度の自信と余裕を持って臨んでいたはずが、一瞬の気のゆるみから不覚をとり、取り返しのつかないことになる。人生場裏ではよくあることです。早朝研修の皆勤という挑戦も同じです。張りつめた糸が切れて、一旦は落胆してもメジャーな心の持ち主は深く傷ついたその心を周囲に見せることなく自ら修復の道を探し、更なる前進への糧としてしまうのです。まさに、早朝研修においての自分のありようが「人生」における自分のありようなのです。このようなあり方が実生活での不手際を未然に防ぐことにさえなるのです。一日の失敗を真摯に見つめ、何故そうなったかを分析し、原因を確認し、改善していくのであれば、その失敗はかえって後々のプラスになるわけです。

私たちは野球に関してはイチロー選手に遠くおよびませんが、「人、生きる」ことへの追求においてはイチロー選手以上になることは可能なのです。イチローは、一回一回の試合に向けての段取りと準備を他の誰よりも入念にしているようですし、オフの時も変わらぬ姿勢で来季を見つめ、更なる練習に励んでいると聞きます。このようなイチローの生き方に、私たちのスコーレでの取組みを重ね合わせてみると、私たちにも挑戦し、克服していくことが出来そうです。

野球でいうところの基本はキャッチボールであり、相手の一番取りやすいところを目がけてボールを投げることがまた基本の基本です。スコーレ学習の基本は早朝研修です。早朝研修に参加しているお互いのことを最優先に考え「今日も良かった」と思ってもらえるような早朝研修にお互いが努力してかたち作っていくことが大切と考えます。

基本を忘れずスコーレ活動に取組み、日々そのタイトルを塗り替えていく気概を持ってすれば、イチローや白鵬関、松井選手にも勝るとも劣らぬ生き方を誰もがすることが出来ると思います。

それには、1月1日から12月31日までを一本の見えない糸を張り、プツンと切れない周到さを施しながら一日一日を乗り越える心構えが必要と考えます。早朝研修の有用性は永池会長がつとに説いておられるところであり、私自身も自分の生き方を確立する上で大いに役立ってきたと思うのです。

（鈴木氏は2年連続の皆勤です）

四季折々の自然に支えられて

青葉都筑ブロック　　霜田千代松

平成22年1月1日元旦より平成22年12月31日まで早朝研修に皆勤する事が出来ました。ありがとうございます。

1月の初めです。早朝会場に通う道中に小さな梅林があります。お母さんもう梅が咲き始めたね。まだ固く白い蕾がたくさんそして、白い花びらがちらほら、ほのかに梅の香りを感じます。中旬を過ぎると、花はちらほらから満開に、まだ暗い冷気の中に咲く梅の花の塊は咲き誇っている感じではなく、そこには凛としたものを感じます。

3月に入りますと、朝は少し明るく、道中には「咲き誇る」桜の花が咲き始めます。お母さん、あそこの桜咲き始めたね。ソメイヨシノから始まり八重・ボタン桜まで楽しませてくれます。1月から3月の三ヶ月間の朝の冷気、霊気を浴び体感することで、冬、春、夏、秋を「心・身」共に健康で過ごせる源をいただいたように思います。4月、5月沿道のサツキや躑躅が見事に咲いています。

梅雨時、雨が降るのは自然、雨合羽を着て傘をさして歩いて会場へ、研修が終わり、雨が止んでいると嬉しくなります。畑ではキュウリや、トマト、茄子、ゴーヤ夏野菜がなっています。

夏、起きる時間、お父さん朝やけがすごく綺麗ですよと、家内が感動します。ちょうど「日の出」と重なり合掌。日中暑くなる前に、湿度の少ない僅かな時間、涼しさを感じます。百日紅が咲いています。

秋、9月中旬から11月、萩の花をはじめ名前に覚えのない花が各家の鉢植えに咲いています。

12月、夜明けが遅くなる時期、明けの明星や北斗七星、満月、上弦・下弦の月、特に朝の満月は黄、赤、蒼、白と様々な表情、色があることに気づきます。三日月の隣に明けの明星が並び家内と二人感動します。

まさに人は、自然から氣を貰い感動を貰い支えられている、そしてお互いがその人に支えられていると自然の力を強く感じます。

平成22年12月下旬、お母さんまだ、12月なのに、あそこの梅の花が咲き始めたよ。

健康だからこそ、その健康をもたらしてくれる、整った環境の研修会場があることと、そして冬は暖房、夏は冷房と会場を整えて下さる共に学ぶ方々の御蔭さまです。そして夫婦揃って一緒に皆勤を成し得たことは大変嬉しく妻に感謝しています。

今年も歩みを止めることなく早朝研修で健康を保ち、「成長」して参りたいと思います。

（霜田氏はご夫妻揃っての皆勤です）

連　載　？

私の人生学概論
少年時代～人生の基礎を築く～

多摩ブロック　　金井　繁

郷土・八王子の話

私は1942年生れの68才、少年時代を過ごしたのが東京・八王子です。

まず郷土の話から始めましょう。八王子は戦国時代北条氏の出城があり、江戸時代には、絹の生産地として名をなし、人口2万人、道幅26m、距離2㎞に亘る街道筋は宿場町として栄え、あのトロイ遺跡を発掘したシュリーマンが1865年横浜から馬を駆って梅雨時の激しい雨中にこの地を見物しています。

今ではミシュランの三ツ星観光地として有名になった高尾山には、江戸開城前後に西郷や海舟と面談交渉した英国書記官アーネスト・サトーが登山をしています。

そして大正と昭和の天皇陵につながる甲州街道には歴史あるいちょう並木が美しい黄葉を描いています。そんな歴史と豊かな環境が私の感性の一部を形作っていることは間違いありません。

人生学講座

敗戦から戦後の復興期に育つ

今手許に小学校入学時の貴重な写真があります。小奇麗な洋装姿で、笑顔の近所の女児２人に挟まれて写る私と言えば、お古の児童服に学童帽と、親が作った手製のズック入れ、破れた足袋に下駄という姿、まだ空襲の焼け跡が残る昭和23年のことです。

商業地に住んでいた小学校時代、友達の親は商家や医者が多く、焼け出されてバラック同然の住いだった私は、子供なりに貧富の差を目のあたりに感じていました。小学6年も終わりの頃にクラスで自転車遠足をすることになりましたが、最新デザインの真っ赤な子供用自転車に乗ってきたＳ君が「君の家に自転車あったの？」と大人用ボロ自転車に乗った私に、投げかけたその言葉に、いささか傷ついたものでした。

しかし当時としては卑屈になるのも一瞬で、親の苦労する姿を素直に受け入れていました。それどころか、裕福な家庭の友達と遊んだお陰で、その子の家では、自家には無い子供用の百科事典を読ませて貰ったり、外車でドライブや外泊に連れていって貰ったりした数々の社会体験が、今でも私の潜在意識にプラスに作用していると感じることがあります。

多感な時代

小学校当時の通信簿をみると、体重、身長とも学年平均以下でした。運動神経は鈍く不器用で神経質ながら、年下相手の学校ゴッコは先生役が好きで、工夫してする遊びが得意でした。

そんな目立たない私も高校生になると、体格も標準並に成長、部活に精を出すようになり、卓球部や音楽部、経済研究部を股に掛け、昭和32年のこの頃すでにＰドラッカーやコンビニやドラッグストアが米国にあることを知り、中学校へは保護者家庭向けの買物調査を行ったり、伝統ある校内誌の企画発行やマーケティング結果を地元商工会議所で発表したり、今思えば、現在マスターズで企画製作している原型みたいなことをしていたことになります。この時代、何かを作り上げる楽しさや意義を、数多く経験したように思います。

昔の子供、今の子供

仕事に追われていた両親は「人に迷惑を掛けるな」とは言ったものの、子育ては放任主義でした。それでも何とか曲がらずに育ったのは、「親の背中」と「世間様の子供に対する調整機能」があったからでしょう。

さて「私の代」の子育てといえば「夫は仕事、妻は専業主婦」が当然で、それも経済的成長が家庭機能の劣化をなんとか穴埋めしていたような時代でした。結果として私の代までは年功序列や高度経済成長を享受でき「子供は勝手に育つ」「子供は成人したら責任を持つものだ」という環境があったように思います。

しかし現在は大きく変わりました。大企業でも倒産し、いじめ不登校、自殺やうつ病、児童虐待、非正規雇用の増大や未婚率上昇、など社会的負の部分が際立つ社会になってきました。子供達は家庭内と教師の限定されたコミュニティの中で育ち、社会経験の乏しい環境が内向きな性格をつくり、これが就業意欲や結婚率、貧困問題まで影を落とす、とまで指摘する専門家もいます。

そんな今、私を含めリタイアした年代が引退後にいわば世間と隔離した「私生活」に埋没していいのだろうか？と強く思います。こんな閉塞感の時代だからこそ、その昔「人生の基礎をつくった子供時代の貴重な体験」を孫世代に伝えて、「今の子供達」が少しでも豊かな少年時代をおくれるようにバックアップしたいと思うのです。

次回連載②は「職場生活」の話をします。

【　つづく　】